

百万

古名

嵯峨物狂

又

嵯峨大念仏

観阿弥作

ワキ 吉野の人

シテ 百万

狂言 門前の者

子方 百万の子

地は 京都

季は 三月

「竹馬にいざや法の道。く。誠の友を尋ねん。

詞

「是は和州三芳野の者にて候。又是に渡り候ふ幼き人は。南都西大寺のあたりにて拾ひ申して候。此頃は嵯峨の大念仏にて候ふ程に。此幼き人を連れ申し。念仏に参らばやと存じ候。

シテ詞

「あら悪の念仏の拍子や候。わらは音頭を取り候ふべし。南無阿弥陀仏。

地

「南無阿弥陀仏。

シテ

「南無阿弥陀仏。

地

「南無阿弥陀仏。

シテ

「みだ頼む。

地

「人は雨夜の月なれや。雲晴れねども西へゆく。

シテ

「あみだぶやなまうだと。

地

「誰かは頼まざる。誰か頼まざるべき。

シテ

「是かや春の物狂。

地

「みだれ心か恋草の。

シテ「力車に七くるま。

地「積むとも尽きじ。

シテ「重くとも。輓けやえいさらえいさと。

地「一度に頼む弥陀の力。頼めやたのめ南無阿弥陀仏。

地「げにや世々ごとの。親子の道にまとはりて。く。

猶子の闇を晴れやらぬ。

シテ「朧月の薄曇り。

地「わづかに住める世に。尚三界の首枷かや。牛の車

のとことにはに。何くをさして引かるらん。えいさ

らえいさ。

シテ「輓けや輓けや此車。

地「物見なり物見なり。

シテ「げに百万が姿は。

地「本よりながき黒髪を。

シテ「荊棘のごとく乱して。

地「旧りたる烏帽子引きかづき。

シテ「又眉根黒き乱墨。

地「うつし心か村烏。

シテ「憂かれと人は添ひもせで。

地「思はぬ人を尋ぬれば。

シテ「親子のちぎり麻衣。

地「肩を結んで裾にさげ。

シテ「すそを結びて肩にかけ。

地「筵切。

シテ「菅薦の。

地「みだれ心ながら南無釈迦弥陀仏と。信心をいたす

も。我子に逢はんためなり。

シテ「南無や大聖釈迦如来。我子に逢はせ狂気をもとゝ

め。安穩に守らせ給ひ候へ。

子詞「如何に申すべき事の候。

ワキ詞「何事にて候ふぞ。

子「是なる物狂をよくく見候へば。古郷の母にて御

入り候。恐れながらよその様にて。問うて給はり候へ。

ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。やがて問うて参らせうずるにて候。いかに此なる狂女。おことの国里は何くの者ぞ。

シテ詞「是は奈良の都に百万と申す者にて候。

ワキ「それは何故かやうに狂人とは為りたるぞ。

シテ「夫には死して別れ。只一人ある忘形見の翠子に生

きて離れて候ふ程に。思ひが乱れて候。

ワキ「さて今も子と云ふ者のあらば嬉しかるべきか。

シテ「仰せまでもなしそれ故にこそ乱髪の。遠近人に面をさらすも。もしも我子に廻りや逢ふと。車に法の声立てゝ。念仏申し身を碎き。我子に逢はんと祈るなり。

ワキ「げに痛はしき御事かな。誠信心わたくしなくは。かほど群集の其中に。などかは廻り逢はざらん。

シテ詞

「嬉しき人の言葉かな。それに附きても身を碎き。法楽の舞をまふべきなり。囃してたべや人々よ。忝くも此御仏も。羅睺為長子と説き給へば。

地

「我子に鸚鵡の袖なれや。親子鸚鵡の袖なれや。

百万が舞を見給へ。

シテ

「百や万の舞の袖。我子の行方祈るなり。

シテクリ

「げにや惟ん見れば。何くとても住めば宿。

地

「住まぬ時には故郷もなし。此世はそも何くの程ぞ

や。

シテサシ

「牛羊径街にかへり。鳥雀枝の深きにあつまる。

地

「げに世の中はあだ浪の。よるべは何く雲水の。身

の果いかに檜の葉の。梢の露の故郷に。

シテ

「憂き年月を送りしに。

地

「さしも二世とかけし中の。契りの末は花かづら。

結びもとめぬあだ夢の。長き別れと為り果てゝ。

シテ

「比目の枕敷波の。

地「あはれはかなき契りかな。

クセ「奈良坂の。児の手柏の二面。とにかくにも佞人の。なき跡の涙越す。袖のしがらみ隙なきに。思ひ重なる年波の。流るゝ月の影惜しき。西の大寺の柳陰。みどり子のゆくへ白露の。起き別れて。いづちとも知らず失せにけり。一方ならぬ思草。葉末の露も青によし。奈良の都を立ち出でゝ。顧り三笠山。佐保の川を打ち渡りて。山城に井手の

里。玉水は名のみして。影うつす面影。浅ましき姿なりけり。かくて月日を送る身の。羊の歩み隙の駒。足にまかせて行く程に。都の西と聞えつる。嵯峨野の寺に参りつゝ。四方の景色を詠むれば。

シテ「花の浮木の亀山や。

地「雲に流るゝ大井河。誠に浮世の嵯峨なれや。盛りすぎ行く山桜。嵐の風松の尾。小倉の里の夕霞。立ちこそ続け小忌の袖。かざしぞ多き花衣。貴

賤群集する。此寺の法ぞ尊き。彼よりも是よりも。唯此寺ぞ有難き。忝くもかゝる身に。申すは恐れなれども。二仏の中間。我等ごときの迷ひある。道明らめんあるじとて。毘首羯磨が作りし。赤梅檀の尊容。やがて神力を現じて。天竺震旦我朝。三国に渡り。有難くも。此寺に現じ給へり。
シテ「安居の御法と申すも。

地「御母摩耶夫人の。孝養の御為なれば。仏も御母を。

かなしび給ふ道ぞかし。況んや人間の身として。などかは母を悲しまぬと。子を恨み身をかこち。感歎してぞ祈りける。親子鸚鵡の袖なれや。百万が舞を見給へ。

地「あら我子恋しや。

シテ「是程多き人の中に。などや我子の無きやらん。あら我子恋しや。我子給べなふ。南無釈迦牟尼仏と。地「狂人ながらも子にもや逢ふと。信心はなきを南無

阿弥陀仏。南無釈迦牟尼仏南無阿弥陀仏と。心ならずも逆縁ながら。誓ひに逢はせて給ひ給へ。

ワキ「余りに見るも痛はしや。是こそお事の尋ぬる子よ。よくく寄りて見給へとよ。

シテ「心強や。疾くにも名乗り給ふならば。かやうに恥をばさらさじ物を。あら恨めしとは思へども。

地「たま／＼逢ふは優曇華の。花待ち得たり。夢か現か幻か。

地「よくく物を案ずるに。く。彼御本尊はもとよりも。衆生のための父なれば。母諸共に廻り逢ふ。法の力ぞ有難き。願ひも三つの車路を。都に帰る嬉しさよ。く。